

「地元で作られたものを食べる意味」

浅野 晃彦



浅野委員

略歴 昭和30年東京生まれ。福祉施設職員を経て、昭和58年より現在地（神居町西丘）で営農。野菜の有機栽培、水稲のアイガモ農法に取組む。

東京生まれの私が、この地で農業を始めて36年が経ちました。その間、多くの方に助けられながら、不慣れな農作業を続けながらも子ども5人を大過なく育てることが出来て、改めて36年の間、関わって頂いた方々に感謝致します。そこで当時も今も、厳しいと言われる農業の魅力は何だったのか、と振り返ってみるといくつかあるので挙げてみます。第一に、究極の自営業であるということ。今はあまり使いませんが、百姓という職名が示すようにいくつもの業種に関わる知識や技術を身につけていないと、インフラが万全とは言えない田舎では暮らしていけないのです。私が暮らし始めた時分に周りの人と触れ合うたびに、農業技術だけではなく、機械整備や上下水道のメンテナンス、簡単な小屋程度なら自分で建ててしまう、など都会には無い逞しさに驚かされたものです。第2に家族が常に一緒に居ることが出来る、ということも子どもたちを育てる上で、何に依って家族の生活が成り立っているのかということを実際に目にしたり、手伝ったりする事で理解していったと思います。そして第3番目ですが、自分たちが納得して安心できる食べ物を手に入れる事が出来るという事でした。農業を始めた頃は、水田と畑があったので、お米と自分たちが食べたいと思う野菜を中心に作りました。最初の頃は不慣れな為と、土作りも不十分だった為、なかなか売り物になる様な作物は出来ませんでした。しかし、自分たちが手を掛けたものを口にした時、世の中で一番美味しいと思いました。それはきっと冷静な判断なのではなく、その作物に関わった時間や手間が本来の味覚を押し上げたのだと思います。皆さんも家庭菜園などで採れたものを口にした時、同じ様な感覚を覚えるのではないのでしょうか。

味覚とは不思議なもので、値段が高いものとか、季節外れの珍しいものだったり、TVなどで有名人が食べているものなどは、頭で美味しいと思わなくてはならないという感覚になります。しかし、自分が手を掛けたものや、知り合いが心を込めて作ったものは身体で美味しいと感じる事ができます。また、同じように作る側も、食べる人の笑顔を想像すると、更に美味しいものを作りたくなります。そしてそれらが本当に美味しいのは旬の時期なのです。地元で採れるものを食べれば、旬の一番美味しいものを食べる事が出来るし、自分達の為に心を込めて作物を作ってくれる生産者を応援する事が出来ます。また、将来を担う子どもたちにも生まれ育った自分の故郷の素晴らしさを食べ物を通して伝えることも出来ると思います。今は凡ゆる食べ物を全国或いは世界中から手に入れる事が出来ますが、それを運んでくる為の石油などの大きな消費や、換金作物に切り替え過ぎてその土地の独自の文化が失われたり、自然環境が変化してしまうという危険性を考えると、もう一度身近な物を見直して暮らす事が大切な事だと思います。我が家では、こんな当たり前の事を36年続けて来ました。これからもこのようなスタイルで農業をしていければと思います。



【編集後記】

初めて「特集号」を発行しましたが、いかがですか？これからも紙面の充実に編集委員一同がんばりますので、ご愛読いただきますようよろしくお願いいたします。第15号もお楽しみに。
(T. T)

【発行】

神居雨紛・台場・西神居地区
まちづくり事業実行委員会

【編集】

カムイ(まち協)新聞編集委員会

【連絡・問合せ先】

旭川市神居支所
TEL 61-2311

特集

『特集号』の発行にあたって

神居まちづくり推進協議会（会長は佐々木和雄忠和地区市民委員会会長）では、委員の改選にあたり、これまで委員が選任されていなかった神居雨紛、台場、西神居の3つの地区市民委員会から新しく委員が選任され、名実ともに神居地域が1つになって地域づくりに取り組む「オール神居」の新しい委員体制ができあがりました。これを記念して3地区を紹介する「カムイ(まち協)新聞」の『特集号』を発行します。

ALL KAMUI



カムイ新聞

まち協

平成30年11月16日発行

神居雨紛地区



雨紛地区は農業地区「実りの秋」に感謝

台場地区



地区のイベントに育てたい「ポニーばんば」

西神居地区



「カムイスキーリンクス」の今後に大きな期待

特集

神居雨紛地区

雨紛地区は農業地区―「実りの秋」に感謝

「地区の農業」について話す三本委員

雨紛地区には、神居公民館上雨紛分館の近くに「上川水稻発祥之地」の記念碑があるように、この地区は今から125年以上前の神居村誕生の頃から水田地帯として発展してきました。

昨年のお米農家戸数は28戸、水稲作付面積は235.2ヘクタールであり、今も米づくりを主とする地区と言えます。

近年は、野菜などの畑作物の生産も増えてきています。

しかし、他地区と同様に農業者の高齢化や後継者不足が課題となっており、休耕転作田も多く見られます。

今年は、天候不順により、厳しい出来でしたが、「実りの秋」を迎えることができたことに感謝したいと思います。



三本治夫神居雨紛地区市民委員会会長



「上川水稻発祥之地」の記念碑



開 祥光さん

上雨紛の水稻専門農家開 祥光さんに「米づくり」のご苦労を伺いました。

毎年、収穫するまでは、いつときも気が抜けません。特に、苗を育て、田植えがすむまでの「春」は、長年米づくりをしてきましたが、今でも最も大変な時期だと感じています。

今年は、大雨があったり、低温の時期が続くなど、苦労の多い年でしたが、なんとか無事、稲刈りを終えることができ、ホッとしています。

これからも、「美味しい米づくり」に精一杯頑張っていきたいと思っていますので、ぜひ皆さんにお米をたくさん食べてもらいたいですね。



台場地区

地区のイベントに育てたい「ポニーばんば」

「夢」を話す大高委員

「ポニーばんば」の大会は、およそ30年ほど前から私の個人的な趣味で開催してきた大会です。

写真を見るとわかるように、ポニーは大人の背丈の半分くらいの小さな馬で、全道にたくさんの愛好者がいて、今年の大大会には道内各地から30頭が参加しました。多い年には50頭の参加があったこともあります。

この大会を個人的に続けるのではなく、「地区のイベント」に育てていきたいと、以前から「夢」をもっていました。

今後、レースだけではなく、来場者が楽しめる企画を考えていかなければなりません。地区の皆さんと話し合いながら、ぜひこの「夢」を実現したいと思います。

毎年、6月の第3日曜日に開催していますので、来年は6月16日の開催です。ぜひ多くの方に見に来ていただきと思います。



大高朝幸台場地区市民委員会会長



他会場の様子（参加者と来場者の交流）



小西一彦さん

初めて「ポニーばんば」を見に来た小西一彦さんに会場で感想をお聞きしました。

もうかなり前になりますが、雨紛の競馬場で「ばんば」を見て以来、久しぶりのばんばでした。

ポニーは小さな馬ですが、真剣勝負のレースはけっこうな迫力で、見応えも十分。

今後、ポニーと子どもたちがふれあえたり、参加できるような機会をつくる

と、子どもたちもたくさん見に来るのではないのでしょうか。



他会場の様子（パパ、ママとレースに参加）

西神居地区

「カムイスキーリンクス」の今後に大きな期待

「今後への期待」を話す松浦委員

平成29年10月26日、大雪カムイミントラDMOが設立され、「カムイスキーリンクス」への注目が一気に高まりました。

北海道のカムイスキーリンクスから世界のカムイスキーリンクスへ。将来、日本全国はもとより、アジアや全世界から多くのスキー客や観光客がカムイスキーリンクスにやって来ることが予想されます。そうなるこの地区も大きく変わっていくことでしょう。

私たち地元に住む者として、何か協力できることはないだろうか、あるいは、このことを地区の活性化にどのようにつなげていくのかなど、今後考えていかなければならないことがたくさんあります。

今年は既にインフォメーションセンターや自動ゲートなどの整備がスタートし、今後、どのようにしていくのか大変楽しみです。そして、地区の活性化にぜひつながってほしいと大きな期待を寄せています。



松浦清一西神居地区市民委員会会長



（左）大雪カムイミントラDMOと（右）観光庁が推進している「観光地経営」の視点に立って、観光地域づくりの担取り役となる地域づくり推進法人のこと。旭川市など1市7町で構成する。滞在型、通年型観光を圏域全体で促進するため、カムイスキーリンクスを拠点としたスノーリゾート 地域の構築に取組む。



水澤拓也さん

カムイスキーリンクスの近くで果樹園を営む水澤果樹園の水澤拓也さん（旭川市果樹協会会長）にお話を伺いました。

「スノーリゾート」って、いい響きですね。大雪カムイミントラDMOの取組みに夢がドンドンふくらんでいきます。

地元には、サクランボ、りんごなどの果樹園がありますので、何とかこれを生かしていくことはできないものか、これから皆

で知恵を出し合っていきたいと思っています。

これまであまり世界のことを考えたことはありませんでしたが、世界中から多くの方がカムイスキーリンクスにやって来るようになるわけですから、今から心がわくわくします。

